

## 薄田泣菫の書簡一通

佐伯哲夫

薄田泣菫の書簡が一通見つかったので紹介する。

以下、表装済みの手紙・封筒の写真版と翻字を示すが、行頭に順序数を付す。下注の便のためである。

## 〔手紙〕

- 1 承はり候へば此度の風水害に就いては貴家に
- 2 於かせられも浸水の厄
- 3 を蒙らせられ候由御困惑
- 4 さこそと御察し致し候
- 5 御家族の御方々に御怪我など
- 6 あらせられず候や御伺致し候
- 7 当方は庭木を吹倒され
- 8 屋根瓦を跳ね飛ばされ候
- 9 位にてさしたる被害は
- 10

注1 此度の風水害 出石町史編集委員会『出石町史 第二巻』

(平成三・三・二)の「風水害年表」と手紙の日付、封筒スタンプの年月からして昭和九年に襲った〈室戸台風〉(運わるく大阪湾の満潮時と重なった)と見られる。年表に引かれた「弘道小学校百年史」の中から摘記すれば、「九月二一日払暁より台風襲来、午前八時ごろ、急に一大洪水となり全町浸水、この洪水のため大川の橋梁全部流失」。大川は出石川。円山川の一支流。

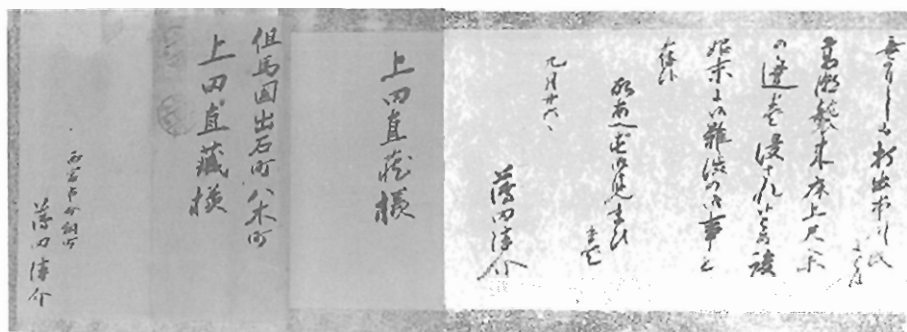
3 「て」脱漏。

9 濁点なし。

11 打出市川氏 当時、兵庫県武庫郡精道村打出(現、芦屋市打出町)に住む市川一家。泣菫の妻修はこの市川氏の出。

17 九月廿六日 台風襲来の五日後にしたためられたことになる。早速の風水害見舞。





- 11 無かりしも打出市川氏にては  
12 高潮襲来床上尺余  
13 の邊まで浸され候とか後  
14 始末に御難洪の御事と  
15 存候  
16 取あへず御見まひまで  
17 九月廿六日  
18 薄田淳介  
19 上田直藏様
- 20 但馬國出石町八木町  
21 上田直藏様  
22 西宮市分銅町  
23 薄田淳介

# 補記

- 18 淳介 泣董の本名。明治一〇・五・一九生、昭和二〇・一〇・九没。詩人、隨筆家、ジャーナリスト。この時、満五七歳。
- 19 上田直藏 本名は上田近夫、先代の上田陶磁器店主。泣董の妻修の弟。近夫は佐伯不美を嫁に迎えるが、市川家の二男ということもあり、のち夫婦して上田ぬいの養子となる。「様」の字体は次さま。封筒の表書きも。
- 20 但馬國出石町八木町 現兵庫県出石郡出石町田結庄。消印は二つとも九・九までしか読めない。
- 22 分銅町 泣董は大正一五年から昭和一九年までここに住んだ。
- 泣董の著作には無関係の書簡である。
- 松村緑『薄田泣董考』（教育出版センター、昭五二・九・二〇）の「評伝篇」はおおむね編年体になっているが、昭和九年のところでは、創元社から刊行された『独樂園』の内容紹介と当時の泣董の闘病生活に触れるにとどまる。
- 泣董の最晩年は病のため、妻の修による代筆が増えたようだが、この手紙の文字は、本人のものと思われる。若い頃のそれに比べいくらか暢びやかさに欠けるが、日常生活の一端を伺うことのできる内容のものである。

この手紙を発表するについては、上田近夫氏（故人）の長男で現店主、稔（号、鶴山<sup>かくざん</sup>）氏夫妻の御好意による。ちなみに稔氏は筆者の従兄に当たる。